

巻頭言

建設業の安全は1K, カネだ

國島正彦



1987年9月、それまで15年間勤務した建設会社の糸魚川・青海の現場での送別会で、職人の本音を教えてくれた女性作業員のHさんから「大学への転職なら、土方の星になって」との送辞を頂いた。それを重く受けとめて、研究課題「我が国の建設現場の労働死亡災害を半減させるシステム開発」および「公共工事の執行制度と政府調達に関する総合的研究」に取り組んだ。

1991年から、建設労働災害・事故データの要因分析と国際比較、建設労働環境の現場観察・聞き取り調査・アンケート調査・WBSを用いた作業分析、赤外線カメラによる作業苦渋性指標分析、コンピュータグラフィックスによる建設現場の視覚化、安全保護具性能の人体ダミーを用いた墜落災害の再現化による検証、建設災害防止における発注者の責任と役目等を調査研究した。

いくつかの新しい発見があったが、よく分からない、雲をつかんでいる感が続いた。

2003年に、建設労働安全管理に関する研究は、正体が見えたので止めた。

日本の建設業が、現場の労働災害・事故防止のために、膨大な資源とエネルギーを投入しても、事故・災害発生が、日本より遥かに杜撰・いかげんな安全管理とみえるアメリカと同程度であり、それほどよいともみえないヨーロッパ諸国より、2～3倍も多い理由が分かった気持ちになったからである。

中国・清華大学出身の博士課程学生S君が、2002年10月から2003年3月まで、北関東に位置する土木（道路工事）および建築（マンション工事）現場で、型枠大工見習および鳶職見習として、24歳から70歳までの現場作業員51名と1日中仕事と生活を共にして観察・インタビューするフィールドワークによって、既往の調査研究成果と異なる知見を得た。

①建設現場の日常は、現場作業員のイハン（行動）だらけである。

現場作業員は、安全作業標準を理解・承知しており無知なわけではない。

なぜイハンだらけか？

②現場作業員は、安全作業標準を遵守すると、“稼ぎにならない”（出来高があがらない）、それでは、不甲斐ない申し訳ないので、稼ぎになる出来高を達成するためには、イハンは当然（やむを得ない）と思っている。

稼ぎにならない、出来高を達成できないと、誰に申し訳ないのか？

自分自身と自分を頼りにする家族のみならず、現場で自分を世話して頼りにしてくれる班長、職長、親方の顔をつぶしてはいけない、顔に泥を塗ってはいけないと思っている。したがって、元請が、朝礼で安全作業指示やKY活動を、いくら言ってもやらせても、わかっちゃいるけど…となる。

『安全作業標準どおりにやっていたのでは、稼ぎにならない』と、大部分の現場作業員、職人、オペレーター等が思っているのであれば、建設現場の安全管理に莫大な資源とエネルギーを投入しても、所期の結果が得られるはずがない。

30年以上前に、惚れ惚れとする仕事ぶりの重量鳶世話役からの忘れられない一言「安全は1Kだ、1KのKはカネだ」の意味が、現場作業員でない小生にも、やっと少しは分かったという気持ちになった。

日本の公共工事は、出来高部分払いを導入して、出来高と支払い金額（数量と歩掛りと単価の妥当性、安全作業標準の経済合理性）との整合性を図るべし、という、2000年4月からの主張は、この研究成果によって、さらに確信を深めた。

2008年5月現在、いまだ、実現していない。

安全に関する人件費、設備・機材費、材料費等が、受入検査（検査ではない）の対象でない“どんぶり勘定”では、建設業の労働安全管理マネジメントシステムが機能不全に陥って当然である。

謝辞 本稿の内容の一部は、平成14年度・15年度の厚生労働科学研究費補助金（労働安全衛生総合研究事業）を受けて明らかにされたものである。